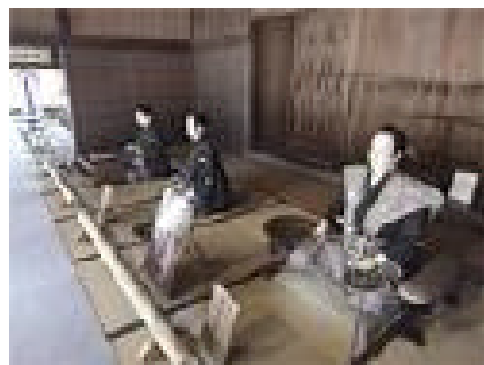
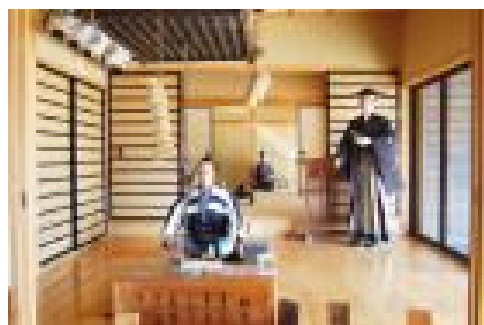
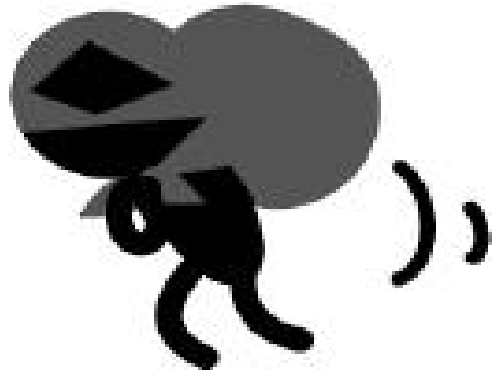


# 塩売り勘兵衛が、ついに・・・

小川村の庄屋・太郎助は、役所から村にすぐ帰り勘兵衛を呼び寄せました。「勘兵衛さん、じつは役所から沢山の熊の皮を買い取りたいというはなしがあったのじゃが、どうだろうか。」と伝えると勘兵衛はとても喜び、すぐ太郎助と共に役所に出向きました。役所に着くと、あの佐々木源内が出てきました。そこで源内が「この前の戦いで、刀や槍をはじめ沢山の道具が足りなくなった。お前から熊の皮など千枚を買い取りたいので納めてほしい。」といったので勘兵衛はにんまりとしました。するとすぐさま、「ところで、お前は何かの商売をしているんだ。」と源内から聞かれて、「塩商人でございますが、このごろは米や綿そして油など何でも商売にしております。」と勘兵衛は応えました。すると、源内は一瞬にして顔色を変えたかと思うと大声で怒鳴りつけ「去年、役所のお金が盗まれた。お前が盗んだのであろう。正直に言え！」と言いだし、勘兵衛は腰を抜かすほどびっくりしてひっくり返り「決して、そんなことはありません。」と応えるのがやっこのことでした。すると源内は、手のひらをひっくり返すように今度は小さな優しい声で「その盗人は捕まえたんだ。」と勘兵衛に大笑いしながら話をするのでした。勘兵衛は何が何やら分からないものの少しホッとして胸をなで下ろしたかと思うと、再び源内は勘兵衛をギロっと睨

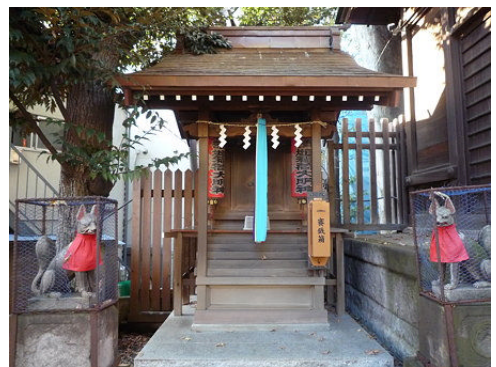


み付け、「お前は、ずいぶん金儲けをしているようだ。聞くところによると、顔を隠し大きな袋を背負って、朝暗いうちに宿を出て夜遅くに宿に帰るそうだが、人には言えないような商売をしているのではないのか。お前は、熊山の奥深くに住んでいると言われる落人の所へ塩を運んでいるのであろう。だからこそ、塩売り商売一つで大きな倉を建て数十人もの従業員を雇える生活ができていないか。」と問いただした。勘兵衛はズバリいいあてられて慌てたものの今度は冷静に「いいえ、お役人様、私は夜も寝ないで商売に励んで儲けたものでござ



いえます。」と応えると、源内は目をいからせて「では、先ほど引き受けた熊の皮は、どこから持ってくるつもりなのだ。言ってみろ！、ほら言えまい。ここまでわしは申したのだ、包み隠さず言わないなら覚悟しろ！」と詰め寄られた勘兵衛は、とうとう観念して今日までのことを一つ一つ話し始めました。

『私は小川村で塩売りを商売とする家に生まれましたが、それはそれは貧乏でした。それでも商売の稲荷神社に毎日わずかな賽銭を上げてお祈りをしたり、苦しい中で積み立てたお金で社（やしろ）を建てたところ、ある日、老人が夢に現れ「お前に宝をあげよう、今から熊山の奥に行くがよい。」と言ったのです。私は普段から信じているお稲荷さんのお告げであろうと熊山に分け入りしましたが、方角を失い途方にくれていました。すると白狐が現れて道案内をしてくれたので、その後について更に奥深く分け入りしました。目の前には大きな川が流れていま



したが橋はありません。そ

の先に道也没有。いつの間にか白狐もいなくなり途方に暮れてその場に暫く休んでいますと、突然、向こう岸の大きな松の枝より手前の岩に吊り橋を架け、縄はしごより下りてくる天狗のような二人の男が現れました。男は身に鹿の皮をまとい、刀を差して近づいてきました。すると「私どもはここに昔より隠れ住む者です。昨夜夢を見て、ここに塩売りが来るとのお告げがありました。私どもは塩が手に入らず大変困っています。どうか誰にも知られないように運んでくれないませんか。」と依頼されたのでこれは商売になると考え、お互いに約束をして決まった日に落ち合って、熊の皮や肝、鹿、オオカミの皮などと塩を交換していくうちにお金が増えていったのです。』と本当の正直に言いました。すると、隣で聞いていた役人たちも驚いて「それでは、家は何軒、村の名前は何というのだ。」と尋ねてきたので、勘兵衛は「その場所の名前は五箇（ごか）と言っていました。家は百五六十軒ほどあるとのこと、大変なところなので、そこまで来る必要はない。猿渡しという吊り橋のところで、お互いに落ち合って物を交換した後に引き返すことをしていました。」すぐ源内は、勘兵衛から聞いたことをそのまま殿様に報告をしました。勘兵衛が白状してしまったことで熊山といわれる五家荘が存在することが、とうとうバレてしまったのです。この後、どうなってしまうのでしょうか？

